

日本はアメリカを知らない——シャーマン將軍の軍人氣質——

南北戦争は「秘密の學校」

南北戦争を理解せずして現代のアメリカを理解する事は出来ない、アメリカの作家ロバート・ペン・ウォーレンは『南北戦争の遺産』と題する著書に書いてゐる。例へば、吾々が今日自明と考へてゐる統一國家としてのアメリカはもとより、西部の大規模な開發、大企業の出現、高度の科學技術やプラグマティズムの哲學の發達、近代的な軍事思想の確立、イデオロギー的な色彩の希薄な政治形態等々、それらは總て南北戦争の影響の下に、もしくはその結果として生じた現象であつて、世界的大國たる今日のアメリカを形作つた基盤だとウォーレンは言ひ、續けてかう書いてゐる。

南北戦争が戦はれた千八百六十一年と千八百六十五年との間に、アメリカは巨大な軍隊

を動員し、装備し、配備する方法を習得すると同時に、それを實行する意志と確信とを身に附けた。更に、これが最も肝腎な點だが、軍事力や經濟力への新たなる確信に裏附けられて、アメリカは舊來にもまして強烈な使命感を備へた國家として出現するに至つた。南北戦争は第一次大戦と第二次大戦の爲の祕密の學校であつた。ドイツの皇帝も總統も、アメリカについての正しい歴史の本を讀んでゐなかつた。

「アメリカについての正しい歴史の本を讀んでゐなかつた」のはドイツ皇帝やヒットラー總統だけではない。戦前の日本と同様であつたし、今日でもさういふ事情は少しも變つてゐない。それゆゑ例へば、灣岸戦争の折、世界の警察官たらんとするアメリカの「強烈な使命感」なんぞ日本はまるで理解しなかつたし、イラク軍がクウェートに侵攻するや、「巨大な軍隊を動員し、装備し、配備」したアメリカの凄さに眞劍に思ひを致すといふ事もなかつた。そして、灣岸戦争後、もはや共に血を流す「同盟國」として頼むに足らずとて、専ら金を絞り取る事のみ對日政策を轉換したかに見えるアメリカに對して、吾國では政治家も知識人も、灣岸戦争の折の破廉恥な對應なんぞ綺麗さつぱり忘れ果て、情緒的

な反米感情を募らせてゐる。

それはともかく、かの「砂漠の嵐」作戦を指揮したアメリカの軍人にとつても、南北戦争は「祕密の學校」に他ならなかつた。例へば、一九九二年二月十一日號の『USニューズ&ワールド・リポート』誌によれば、サウデイの司令部にあつたシュワルツコフ將軍の私室には、南北戦争時の北軍の猛將ウィリアム・T・シャーマンの『回想録』が置いてあり、手垢で汚れたその部厚い本の次の様な箇所に、將軍は大きく印を附けてゐたといふ。

現代の軍隊は高度に組織化されてゐるから、將軍は司令官室に陣取つて、ピアノの鍵盤でも叩く様な積りで各部隊に指示を與へてゐればよい、などと考へる者もある。とんでもない心得違ひである。指揮する者の姿は常に軍の先頭にあつて、部下の目に曝されてゐなければならぬし、指揮官の精神や活力は總ての部下に感化を及ぼしてゐなければならぬ。

シャーマンのこの教へをシュワルツコフ將軍は忠實に守つて、サウデイでは出来る限り自ら部下を叱咤激勵すべく心掛けてゐたといふ。

この記事に觸發されて、私はシャーマンの『回想録』を讀んでみた。そして、「一つの國民の戦ひ方はその國民の物の考へ方を反映する」といふウオーレンの言葉を屢々思ひ出した。そこに示されてゐる猛烈な自我の強さも、恐るべき意志力も、一切の感傷を退ける飽く無き合理精神も、メルヴィルとかヘミングウェイとかいふ剛毅な作家を生んだアメリカならではのものである。大東亞戦争に於て、日本はアメリカの物量作戦に負けたのではない、アメリカの文化に負けたのだと、いつぞや福田恆存氏が書いてゐたが、『回想録』を讀んで私はそれを痛感した。シャーマンは「戦争は地獄だ」と常々語つてゐて、敵を叩き潰す爲に必要とあらば、冷血漢と罵られようとも、非情に徹し得る軍人であつた。それゆゑ彼は、軍事目的追求の飽く無きその態度ゆゑに、「近代戦争の豫言者」と評される一方、「現代の野蠻の先驅者」とも評されてゐる。しかし、サミュエル・ハンティントンが『軍人と國家』に書いてゐる様に、南北戦争後、盟友ユリシーズ・グラント將軍の跡を襲つて聯邦軍總司令官となつたシャーマンは、十五年の長きに互つてその地位にあり、辭して後、千八百九十一年に世を去るまで、アメリカの軍人に絶大な影響力を揮ひ續けたのであ

つて、シユワルツコフ將軍の逸話が示す通り、今日なほその影響力は衰へてゐない。さういふアメリカについて、吾々は餘りに無知である。だが、「アメリカについての正しい歴史の本を讀んでゐなかつた」爲に、吾國がまたもや臍を嘔む様な事態を招來しないとは限らぬ。それゆゑここに猛將シャーマンの戦ひ振りの一端を紹介しようと思ふ。

### 「理念の戦争」の慘たらしい經驗

南北戦争に於てシャーマンの名を一躍高からしめたのは、千八百六十四年九月、南部ジョージア州の州都アトランタを陥落せしめた勲功によつてであつた。映畫『風と共に去りぬ』の結末近くに、スクリーン一杯にアトランタの町が炎上する場面が映し出されるが、あのアトランタ攻防戦に於ける攻撃側の總司令官が、當時四十四歳のシャーマンである。既に開戦から三年以上が過ぎ、いつ終るとも知れぬ戦争に、北部には厭戦氣分が漂ひ、二

期目の大統領選舉を目前に控へたりンカーンの焦燥は激しかつた。南部に重大な打撃を與へられなければ、再選は斷念するしかないとまでリンカーンは思ひ詰めてゐた。アトランタの攻畧は、その意味でも頗る重要であつた。南部の鐵道網の中心であり、軍需工場や兵站施設を多數擁する南部最大の要塞でもあつたアトランタは、北部への抵抗の據點として、南部連合國の首都リッチモンドに次ぐ象徴的な意味合を持つてゐたからである。

そのアトランタを攻畧する直前、シャーマンは北軍の時の參謀總長ヘンリー・ハレックに攻畧後の方針について記した手紙を送り、南軍の軍事施設や通信機能を總て破壊し、市民全員を強制的に立退かせ、敵對的な感情を持つ市民が北軍の軍事的施策に影響を與へたり、南軍と通じたりする可能性を斷つ積りだと書き、かう結んだ。

私の野蠻と殘酷に對して、非難の聲を上げる者がゐるならば、私はかう答へよう。戰爭は戰爭であつて、人氣取りではない、と。アトランタ市民が平和を望むのならば、まづ彼等や彼等の仲間達が戰爭を止めなければならぬ。

そして、壓倒的な兵力差ゆゑにつひに降伏を覺悟したアトランタ側との交渉が始り、

シャーマンが市民の立退きを要求すると、果せるかな、アトランタ側はシャーマンの「野蠻と残酷」を激しく難じ、冬が迫つてゐるといふのに、數千人の市民から家を奪ひ、當所なく戦地をさまよはせる積りかと市長は抗議した。シャーマンは答へた。

戦争について、私はこの上なく嚴しい言葉でしか語る事が出来ない。戦争は残酷そのものであつて、優雅なものに仕立上げる事など出来はしない。(中略) 戦争の苛酷な現實に抗議するのは、雷雨に向つて抗議するに等しい。

かくてシャーマンは市民全員を立退かせ、アトランタを徹底的に破壊する。南部人は怖氣立つが、それこそがシャーマンの狙ひであつた。バーク・デイヴィスの『シャーマンの進軍』によれば、アトランタ攻取に取掛つた頃、シャーマンはかう語つたといふ。「この戦争は單なる軍人による蜂起ではない。南部人全員が責任を負ふべき戦争なのだ」。「北部は今や知るべきである。老若男女を問はず、全南部が吾々に刃向つてゐるのだといふ事を」。そして、今、北部がなすべきは、「戦争の恐怖を嫌といふ程思ひ知らせる」事によつて、南部の戦意を完膚無き迄に打ち碎く事だ。「南部人に吾々を愛させる事は出来ない」と

しても、恐れさせる事は出来る」。

事實、「全南部が刃向つてゐる」といふシャーマンの認識は正しかつた。ジェイムズ・マクファーソンが『自由の雄叫び』に書いてゐる様に、南北戦争は北部の奉じた「理念」と南部の奉じたそれとの激烈な對立から起つた。詰り、北部は「聯邦と憲法と民主主義」とを守らうとし、南部もまた、「聯邦に優先する各州の主權と憲法上の權利」とを守らうとして、いづれも決して妥協しようとしなかつた。そして、己が「理念」の正しさを信じる者同士が妥協せずして戦ひ合ふ以上、いづれかが完全に屈服する迄戦争を續けるしかない。その結果、南北戦争は世界戦争史上未曾有の六十二萬人もの戦死者を出す凄慘な殺し合ひとなつたのである。ウォーレンの言ふ様に、さういふ「理念の戦争」の慘たらしい經驗を経た上で、初めて今日のアメリカが存在してゐるといふ事を、「同盟國」の筈の吾國はどれだけ理解してゐるか。

千八百六十二年、開戦二年目の春、西部戦線のミシシッピ川流域で大軍同士が衝突する最初の激戦があつた。「シャイロの戦ひ」である。雙方併せて二萬人以上の死傷者が出た。

『自由の雄叫び』によれば、その折、北軍の司令官であつたグラントは、南軍の戦意に驚嘆し戦慄して、この恐るべき南軍と戦ふ以上、南北戦争は「總力戦」たらざるを得ないと覺悟したといふ。即ち、敵の軍事力のみならず、それを支へる銃後の戦意をも打ち砕かぬ限り、戦争には勝てないとグラントは信じたのだが、グラントの下で「シャイロの戦ひ」を戦つたシャーマンの場合もそれは同様であつた。リンカーンもまた、グラントやシャーマンの考へ方に同意してゐた。アトランタ攻畧戦の一年前、シャーマンは參謀總長ハレツクに長文の手紙を送り、かう書いた。

戦争を起した敵方が戦争に疲れ、嫌氣が差し、聯邦の旗の下にやつて來て平和を懇願する様になる迄は、自分は斷じて、彼等を慰撫したり、中途半端に戦争を止めて仕舞つたりする積りはありません。彼等が戦争には懲り懲りして、この先數世代の間は、戦争に訴へるなどといふ氣持を起さない様にしなければならぬ。(中畧) 吾々は成功しなければなりません。敗滅を受入れない以上、他に選擇の餘地は無い。吾々が南部を征服するか、南部が吾々を征服するか、二つに一つであつて、中間の道などありはしない。

ハレックはこれをリンカーンに讀ませてから、すぐにシャーマンに電報を送つた。リンカーンが全文を新聞に掲載したいと望んでゐて、シャーマンの同意がほしいといふのである。大の新聞嫌ひのシャーマンはそれを斷る。戦争に勝つ爲には總ての新聞を發行禁止にすべきだと、彼は常々公言してゐた。だが、リンカーンはその後も何度かシャーマンの手紙に言及し、その度に贊意を表してゐたといふ。

ここでリンカーンについて詳細に語る餘裕は無いが、巷間流布してゐる、「奴隸解放の父」としてのリンカーン像は餘りにも皮相に過ぎる。例へば、千八百六十二年の議會への教書に於て、リンカーンはかう語つた。「靜穩なる過去のドグマは荒れ狂ふ現在に相應しくない。新しい事態に直面してゐる今、吾々は新しく考へ、新しく行動しなければならぬ」。事實、南北戦争といふ「荒れ狂ふ現在」に對處すべく、リンカーンは憲法違反の謗りも恐れず、言論彈壓もやつたし、政敵や不平分子の逮捕や拘禁も辭せず、屢々「獨裁者」と非難されてゐる。一方、南部連合國大統領ジェファソン・デイヴィスは、リンカーン程に嚴しい戰時政策を採れず、強力な指導力を發揮出來なかつた。さういふデイヴィスの政

治家としての甘さを、南部の敗因の一つに數へる歴史家も少なくないのである。

### 「海への進軍」

それはともかく、アトランタ攻畧後、シャーマンは直ちに「海への進軍」の準備に取掛かる。軍事史上シャーマンの名を不朽たらしめてゐるこの作戦に於て、更に容赦無かつ大規模に彼は「總力戦」を遂行する事となる。

シャーマンの立てた作戦は、約六萬二千の兵を率ゐて南部の軍事施設や經濟資源を破壊しながらジョージア州を速やかに横斷し、大西洋岸の港市サヴァンナを制壓して南部への海からの補給路を斷ち、しかる後に北轉して、サウス・キャロライナ州の州都にして南部の過激派の據點チャールストンを壊滅せしめ、更に北上して、南軍總司令官のリー將軍の下、リッチモンドに立て籠る南軍主力の背後を衝くといふ大作戦であつた。しかも、友軍

の來援をまるで期待せず、完全な敵地の心臓部深く侵入し、食料や物資の補給はほぼ全面的に南部の資源の收奪に頼るといふ大膽極まる作戦であつたから、當初、グラントは躊躇し、リンカーンも強い懸念を示した。シャーマン自身ですら、失敗すれば「痴れ者の暴舉」と罵られるであらうと覺悟してゐた。しかし、シャーマンは自説を強硬に主張し、グラントにかう書き送つた。

どんな事をして私も私は海への通路を切り開き、南部連合國を南北に分斷し、リーの背後に回つてみせます。(中略) 大軍を率ゐて敵地を通過する事が出來たならば、南部を壓倒する力が吾々にはあるのだといふ事を、國內のみならず國外に對しても見せ附ける事になる。(中略) 南部の軍需資源を斷つ爲には、ジョージアの道路も家屋も市民も悉く叩き潰さなくてはならない。(中略) 海への進軍は可能である。ジョージアに悲鳴を上げさせてやります。

シャーマンは「海への進軍」を敢行し、ジョージアは文字通り「悲鳴を上げ」る事となる。シャーマン軍によるジョージアでの破壊行爲は熾烈を極め、デイヴィスの言ふ様に、

「アメリカ史上初めて、廣大な地域が破壊され畧奪され、婦女子にまで戦争の慘禍が及ぶ事となつた」。かくてシャーマンは南部に於て、蛇蝎の如く憎まれ恐れられ、「ヴァンダルの首領」との悪名を奉られる事となる。ヴァンダルとは、かのローマ帝國を侵した蠻族の名稱である。

しかし、この「ヴァンダルの首領」は、部下からは「アングル・ビリー」と呼ばれて敬慕される將軍でもあつた。デイヴィスによれば、平時、シャーマンは觀劇をこよなく愛したといふが、戦地にあつては身なりを少しも構はず、葉巻をくゆらせるくらゐの贅澤しからず、部下と同じ粗末な食事を食べ、部下と同じく地べたに休み、常に部下の安全を第一に考へてゐたといふ。だが、シャーマンは深刻な「二律背反」に直面してゐた。恐怖を武器として敵の戦意を粉碎するといふのが彼の「總力戦」理論の根幹だが、部下の中には、軍規を逸脱して暴虐な所行に及ぶ者も少なくなかつたからである。それにまた、彼は戦争の慘烈に人知れず苦悶してゐて、「海への進軍」の最中、友人にかう書き送つた。

正直な處、戦争にはほとほと疲れ果てました。戦争の榮光なんぞは戯言に過ぎません。

如何に素晴らしい成功を収めたとしても、慘たらしい死體の山を築いた上での事でしかない。しかも、遠方にあつて、息子や夫や父の安否を氣遣ふ家族の苦しみや嘆きの聲が、いつも私を悩ませます。(中畧) 私の知つてゐる限り、部下達は皆平和を求めてゐます。銃聲を聞いた事もなければ、(敵であれ身方であれ) 傷付き切り苛まれた兵士達の泣き叫ぶ聲や呻き聲を聞いた事もない連中だけが、もつと多くの流血を、復讐を、破壊をと、大聲で喚き立てるのです。

デイヴィスの著書には、シャーマンの内なる苦惱を傳へる書簡や逸話が數多く紹介されてゐて、『回想録』の傳へる猛將としての自信に溢れた姿とはまた違つた人間像を知る事が出来るのだが、特にこの書簡は、苛烈な戦争を指揮した軍人ならではの切實な述懐として胸を打つ。

南北戦争が終つて十五年後の千八百八十年、退役軍人會の會合の席上、シャーマンはかう語つた。「通常、戦争を始めるのは、最初の裡だけ勇敢で大膽な文民共だが、嵐が來ると、彼等は決して安全な場所に身を隠す」。そしてさういふ「安全な場所」に隠れながら、

戦局の變化に一喜一憂して勝手な事を言ひ立てる「文民」共を、シャーマンは激しく輕蔑した。エドモンド・ウイルソンの『愛國の血潮』によれば、軍人としての名聲が高まりつつあつた頃、シャーマンは妻にこんな手紙を書き送つたといふ。「歴史を讀みなさい。シエクスピアの『コリオレイナス』を讀みなさい。さうすれば、民衆の評判などといふ代物の正體が解ります」。シエクスピアは『コリオレイナス』に於て民衆の輕佻浮薄を痛烈に批判したが、民意の浮薄はシエクスピアの時代のイギリスに於ても、シャーマンの時代のアメリカに於ても、そしてまた平成の御世の日本に於ても、全く同じである。同様に、安全地帯で勇ましい事を言ふ「文民」の怯懦も、洋の東西を問はない。「人間、肺臟さへ持つてゐれば、遠くの出來事についてはどんな事だつて言へる」とメルヴェイルは言ひ、戦争の時には、「前線に近附けば近附く程、良い人間が多くなる」とヘミングウェイは言つたけれども、常に銃聲の聞える場所に身を置いてゐたシャーマンは、安全地帯で「大聲で喚き立てる」手合とは最も縁遠い男であつた。

所で、第二次大戰の折、ドイツ軍はシャーマンの「海への進軍」を手本にして、かの「電

「撃戦」の作戦を立てたと言はれるが、「海への進軍」は實に合理的に計畫され實行された作戦であつた。進軍の準備をしてゐた頃の事について、『回想録』にシャーマンは書いてゐる。「進軍の速度を鈍らせる」要因を除去すべく、「吾々はあらん限りの努力を拂つた」。「荷馬車には彈藥や糧食や馬糧だけを積込む事にしたから、傷病兵を運ぶ餘地すら作れなかつた」。何よりも優先したのは、「屈強で老練な兵士に充分な武器や裝備を與へ、彼等が持つる力を存分に發揮して迅速に行動出来る様にする」事であつた。要するに、「海への進軍」を行つたシャーマン軍は、戦鬪の邪魔になる一切の要因を排除した六萬二千の純粹な戦鬪集團として組織され、兵士達もシャーマンの期待によく應へた。「海への進軍」も終結に近附いた頃、シャーマンはサウス・キャロライナ州のゴルズボロといふ町で隸下の部隊を閲兵するが、その折の兵士達の様子が凄じかつた。補給も受けずに敵地を轉戦しながらの半年もの作戦行動であつたから、まともな軍服を着てゐる兵隊は一人もゐない。帽子も無ければ靴も無く、裸足で歩いてゐる者も大勢ゐる。ズボンが破れて脛が剥き出しになつてゐるのや、上半身裸などといふのも珍しくない。分捕品の女物の衣服なんぞを纏つてゐる

者さへゐる。けれども、さういふ部下達の様子を見ながら、シャーマンは脇にゐた將校にかう語つた。「觀閲式に相應しい格好とは言ひ兼ねる。だが、戦ふ事にかけては誰にも引けを取らぬ連中だ」。「あの剥き出しの脚を見給へ。素晴らしく立派な脚ではないか」。「汚らしくて、襪を纏つてはゐるが、威勢が良く見て見るからに健康な連中、あれくらゐ逞しい兵隊達が、世界中のどこにゐるか」。

さういふ猛者共が「海への進軍」をやつた結果、リッチモンドの南軍は完全に補給を斷たれ、「後方」も戦意を喪失し、千八百六十五年四月、リーはつひにヴァージニア州アポマトックスに於てグラントに降伏する事となつたのである。

「何かしら偉大なもの」への憧憬

『南北戦争の遺産』をウォーレンは次の様な文章で結んでゐる。

南北戦争の五年間を振返る時、吾々が打たれるのは、個々の人間がその缺點や無知や悪徳を曝け出してゐるにも拘らず、それが如何に人間の尊嚴の可能性について教へてくれるかといふ點である。それは悲劇的な尊嚴である。だが、それは力を呼び起す。人々は錯綜した問題に取り圍まれ、儂い偶然に翻弄され、人生や歴史のどうにもならぬ二律背反に苦しめられた。しかし、さういふ彼等の生の只中から、何かしら偉大なものが、吾々にしかと傳つて來るのである。結局、それこそは吾々が何よりも憧れ求めてゐるものなのかもしれない。

ウォーレンがこれを書いたのは千九百六十一年だが、それからほぼ三十年後の千九百八十年代末に私はアメリカに行き、二年間滞在し、今なほ南北戦争がアメリカ人の心を強く捉へてゐる有様を目の邊りにした。例へば、南北戦争關係の本は良く賣れるから、書店には必ずその種の本を揃へた一隅がある。何度か言及した『自由の雄叫び』にしても、私が滞在してゐた間に大層評判になつた本だが、九百頁程もある大冊だし、日本圓にして五千圓くらゐもしたから、さう気軽に買える本ではない筈なのに、それがベストセラーに

なつたのである。彼地で知合つたアメリカ人の中には、南北戦争関係の古書を蒐集するのが趣味だと語る銀行員もゐた。また、今アメリカに留學してゐる同僚の三川基好氏に、留學先のマサチューセツツ州立大學が所藏する南北戦争関係の本をコンピューターで檢索して貰つたら、二千四百冊以上もあり、昨年出版された分だけでも、五十冊もあるといふ。

これを要するに、ウォーレンの説に従へば、アメリカ人は今なほ「悲劇的な尊嚴」とか「何かしら偉大なもの」とかを「憧れ求めてゐる」事になる。それは詰り、彼等が今なほパンや生命を超えた目に見えぬ何かを大事に思つてゐるといふ事に他ならない。ダニエル・アーロンの『書かれざる戦争』によれば、アメリカの哲學者ウィリアム・ジェイムズは、晩年、南北戦争についてかう語つたといふ。アメリカ人が南北戦争に強い愛著を示すのは、「全國民が共有する最も高邁なものが、即ち、流された總ての血以上に價值ある氣高い精神的情熱が」、その歴史を通じて彼等の心に強烈に傳つて來るからであつて、如何に慘酷たる戦争であつたとしても、南北戦争を含む歴史と含まないそれとのどちらを選ぶかと言はれたら、北部人たると南部人たるとを問はず、大多數のアメリカ人が躊躇無く前者を選

ぶであらう、と。

シャーマンもまた強烈な「精神的情熱」を備へた軍人であつた。しかも、ハンティントンの言ふ様に、彼くらゐ軍人精神を純粹かつ熱烈に體現してゐた人間も珍しい。南北戦争後、グラントは軍服を脱いで大統領になるが、シャーマンは度重なる懇請にも拘らず、「候補に指名されても受けないし、大統領に選ばれても就任しない」と言つて大統領選挙への出馬を固辭し、政治とは一切關係を持たず、政治の軍への容喙に抵抗し、軍を精強たらしむる事に全力を傾注した。シュワルツコフ將軍が印を付けてゐた『回想録』の第二十五章、即ち、「結論——南北戦争の軍事的教訓」と題された章に、シャーマンは書いてゐる。「再び戦争が起つた時に、千八百六十一年の屈辱や混亂を繰返してはならない。それゆゑ、軍は平時に於ても戦時の慣行を斷固保持せねばならない」。

たつた一度の戦争に敗れただけで、「戦時の慣行」から遠ざかる事はかりを考へてゐる日本人に、このシャーマンの言葉は到底通じないであらう。しかるに、ボブ・ウッドワードの『司令官たち』によれば、ヴェトナム戦争後の千九百六十年代後半、アメリカの時の

陸軍參謀次長補佐官のウイリアム・E・ドゥピュイは、「過酷な訓練」による「惱める陸軍」の再建を圖り、實彈を用ゐての實戦さながらの訓練を大いに奨励したといふし、ドゥピュイの弟子で灣岸戦争時の陸軍參謀總長のヴォノは、カンサス州フォート・レヴンワースの基地で將校達にかう訓示したといふ。

アメリカ陸軍が充分な訓練を積んでゐないとすれば、それは「他人」のせゐではない、議會でもマスコミのせゐでもない。自分達の任務を遂行しなかつた君達や私のせゐだ。充分訓練を受けてゐないといふ理由で、若い兵士を死なせるやうなことがあつてはならない。もしさうしたことが起きるとすれば、良心の呵責に耐へ、責任を感じずべきはわれわれなのだ。(石山鈴子・染田屋茂譯)

シャーマンの軍人氣質の傳統を思はざるを得ない。だが、シャーマン的な軍人精神も、ウォーレンの言ふ「何かしら偉大なもの」への憧憬も、目には見えないものだし、目に見えないものに日本人は頗る鈍感だから、今、日本人は經濟とか技術とかいふ次元でのみアメリカを評價し、パンがたらふく食へる國になつたといふだけの事で夜郎自大の言辭を弄

んで、その危ふさに國民の大半が氣附いてゐないのである。

最後に、南北戦争が勃發した直後、シャーマンが語つたといふ言葉を紹介しよう。當時、彼は南部ルイジアナ州で軍人養成學校の校長をしてゐたのだが、元來中西部の生れながら南部をこよなく愛し、南部に大勢の友人を持つてゐたから、開戦の報に大きな衝撃を受け、咽び泣きながら、友人にかう語つたといふ。

この國は血にどつぷり浸かる事になるだらう。どんな結末を迎へる事か。(中畧) ああ、なんといふ馬鹿げた事だ、氣違ひ染みてゐる。(中畧) 君達は戦争について餘りに輕々しく喋り過ぎる。何を喋つてゐるのか、自分でも解つてゐないのだ。戦争は實に恐るべきものだ。それにまた、北部人を見損つてゐるとしか思へない。彼等は平和を好むが、眞面目だし、戦ひを恐れない。(中畧) あれほど精力的で、優秀な技術を持ち、意志強固な連中は、世界のどこにも見當らない。すぐ隣にゐるさういふ連中と戦争をやらうとは、何たる向う見ずか。負けるに決つてゐる。

五十年前、日本はアメリカを大いに「見損つて」散々な目に遭つた。しかるに今、巷に

は「嫌米」とか「ノン米」とかいふ浮薄な言葉が流行り、知識人もまた、「アメリカ叩き」に精を出してゐる。だが、チャーマンの様な軍人も、メルヴィルの様な作家も、日本の文化の中から生れはしない。詰り、日本の文化とアメリカのそれとは飽く迄も異質なのだが、その彼我の異質性を直視し、なほかつ相手の見事に學ぼうとするといふ冷静な態度が、どうして日本人には採れぬのであらうか。



